

## 看護師の歴史・・・抄（医療崩壊に関連して）

週刊文春は、ゴシップばかりの並以下の週刊誌になった。ところが最近、大阪府下のコロナ病棟に勤務する看護婦の嘆きをわずかではあるが、書いていた。本来なら連載するべきものなのだが、ゴシップばかり書いていて、重要な事柄が何か、気づかなくなっている。・・・大阪府の医療監が、高齢者の入院を事実上断れ、と言いき、府知事がクレームをつけた。府知事は、コロナ病棟の悲惨さを知らない。だから建前を言う。看護師は、身をもって知っているから、70歳以上の患者の入院を避けたい。30、40歳代の貴重な社会的存在の入院の方が大切であることを知っている。入院期間も高齢者と比べると、短くてすむし、体力的にも回復が早いだろうと思う。一家の大黒柱である。この人が指定されたホテルで気づかれないうちに亡くなっている、と聞けば、家族は今後の生活を考えるとき、暗澹たる想いにならざるを得ない。

今回の記事で、看護師は、自らの苛酷な就業状態よりも、周囲への心配りを重視している。久々に使命感溢れる看護師の心にふれることができた。・・・彼ら、彼女らの奮闘に対し、コロナ患者の入院のために収入が激減し、給料はともかく、ボーナスが減額されているのである。危険手当と長時間の労働に報いるに、まるで罰金のように削られるのである。そんなバカな話があるか！ だから、手なんか叩いてくれているのは、おちょくられているようなもの。働く人数を増加させるか、減った収入を自治体が補填する方が、気が利いている。これの交渉が医師会や看護協会などの役割なのだが、医師会長があんな馬鹿では、相手にされないだろう。・・・あと数か月したら多少は楽になるだろう。それまで持ち堪えなければならぬ。

## 看護婦の歴史・・・抄

看護の始めは、おそらく縄文時代にはすでに家族や同居人たちが世話をすることから始まっている、と思う。万国共通のことである。医学がどうの、とか看護学がどうの、などは、高々200年の歴史しかない。日本では、古来聖徳太子が四天王寺に施薬院、療病院、悲田院、敬田院の四箇院を作り、貧困病者の救済に当たったり、また光明皇后が奈良興福寺の施薬院、悲田院での多くの老病人に尽くしたことが知られている。

幕末、戊辰戦争でも看護婦は要求されたが、まだ各個人の尽力にまつところが大きかった。明石家万吉（小林佐兵衛）などは私財を投じて身体不自由者の面倒をみたが、奥さんが大変だった。

看護婦が職業として始まったのは明治時代になってからである。この場合、必ず戦争がついてまわる。初めは、会津、長岡などの東軍（「勝てば官軍」でいえば賊軍）を西軍（官軍）が撃破したとき、多くの死傷者がでた。医師や看護人はいたが、戦争で気が荒くなっていた兵士らは、なかなかいうことを聞かない。そこで、女性を看護につければ多少は大人しくな

るのではないかと考えたのがいて、これが功を奏した。ところが、傷病兵は荒くれ者という噂が広まっていて、良家の子女は応募しない。つまり、看護婦というのは、ある種賤業と考えられていた。……応募してきた女性たちは、おかねさんを始め、当時「バクレン」女と呼ばれた（いわばアバズレ女）身分の低い連中だった。ところがこれが幸いし、「女と喧嘩する」のは恥であるとともに、相手が二つ名のある姉御たちだったからか、男を男とは思わない女性たちだったため、兵士たちもおとなしくなった。彼女らは次第に看護の知識を獲得し、のちに順天堂病院の婦長になったのは、「おかねさん」で、世間は、より一層良家の子女になる職業ではない、と思うに至った。西南戦争ののちにも看護婦を募集するが、やはりバクレン女たちばかりであった。ここで、看護婦は白衣の天使でなければならない、という考えを世間に流布し、さらに教育支給金制度をつくり、これが貧しい、特に農村の子女にとって、口減らしとともに自ら稼ぐことができることが好評で、ようやく普通の家庭からの応募がみられるようになった。ただし、そのレベルは、きわめて低いままで、系統だった教育ではなく、経験から得られるものがほとんどであった。

医学教育は、幕末に松本良順（十四代将軍家茂の主治医）が幕臣としてポンペの弟子になったのだが、その他の学生たちは、西洋医学（オランダ医学）を学ぶために諸藩から派遣されたり、篤志家の好意（たとえばラフカディオ・ハーンが” Living God” と呼んだ濱口悟陵）などによって長崎まで来ていたが、形の上では松本良順の弟子ということになった。順天堂の佐藤某（名前がでてこないが）など、当時世界でも一番の外科医だったといわれている。

看護教育は、西南戦争があったのち、博愛社（日本赤十字社の前身）を設立したことから、ようやく系統だった教育が行われるようになったのが、明治 20 年前後であり、ナイチンゲールから 30 年余り遅れた出発である。このころは、「白衣の天使」を標榜していたから、給料は安く抑えられていた。このあたりが、国家に殉ずる精神を強制したものである。

のち、昭和 30 年代に看護婦の叛乱があり、激務の割に給与が低すぎた。「ナイチンゲール精神では、生活できない」。これは正論で、ナイチンゲールが持て囃されたのは、1854 年のクリミア戦争に際し、敵味方関係なく負傷者の看護をしたため、現在の赤十字の発想に合致するもので、称賛されたのである。ナイチンゲールは、良家の子女であり、給料などあってもなくてもよかったのである。それをいいことに、日本でも看護婦の給与を低く抑えたまま激務に耐えることを知りながら、素知らぬ顔をしていたのである。

戦後、「こんな女に誰がした」という歌が流行ったが、生活苦が原因である。この歌もきっかけになった、と思う。

で、幕末から 150 年。新型コロナの発生で、使命感を問われる事態になり、よく堪えたものである。個人にもよるが、多くの看護師が、使命感だけのモチベーションで活躍した。

医師会長やナントカ委員会の長など、口先だけの連中をみれば、いかに激務に耐えたかと感心する。